西藏律典研究豫報

櫻部文鏡

一　序

北京康熙版赤字甘殊爾本文百〇六函の中、最後の十三函は律部（ḥDul-ba, Vinaya）と稱せられる尤もナルタン・デリゲの諸版及びヘルマンベックが目錄を作つた伯林皇立文庫藏の永樂版を基とせる寫本甘殊爾に於ては、この律部は何れも最初第一部を形成してをるので、律部が最後にあり、却つて普通最後になつてゐる秘密部（Rgyud, Tantra）が最初に安かれてゐるのはこの版の一特異點であるらしい。

附屬目錄及びベックの目錄によればこの第十三函の最後には普賢行願贊等數部或は十數部の咒又は偈が添加されてゐるが、これは何れも別に祕密部中に同本の存するもので、今何らかの理由でこゝに添加重出されたにすぎないものであるから、それは除いて、この研究に於ては先づこの十三卷中に含まるゝ西藏律典の如何なる種類のものであるかを明かにし、後にその外、漢譯に於て律典といはれてゐるもので甘殊爾中に存在するものを拾集することにしよう。自分は西藏藏經の概觀的研

究に從つて殆ど七年の日子を經たが學界途廣く、今この律典の研究もしばらく豫報と題して何時詳報を呈露しうるや測り難いが、それは豫め諒恕を蒙りたい。

二　律部所編の八部

一、戒律事 (ḥDul-ba gSḥi (Vinayavastu)

所在　Khe, Ge, Ñe, Ce の四函に亘り、總紙數一千百三十六葉、百〇九卷に分つ。

譯者　迦濕彌羅の親教師 Sarvajñādeva 印度の親教師 Vidyākaraprabha 迦濕彌羅の親教師 Dharmakara 翻譯官尊者 dPal-gyis Lhun-po 翻譯。印度の親教師 Vidyākaraprabha 大校修翻譯官尊者 dPal-brtsegs 翻譯、校閲、刊定。

これは普通律典に於て揵度(四分律等)又は跋渠(摩訶僧祇律等)と稱せらるゝ部分の說一切有部に屬するものである。漢譯では四分律でも五分律でも十誦律でも皆、揵度は各部派それぞれの纒つた廣律の一部分を占めてをるが、根本說一切有部の律典は義淨によつて分本譯出せられてをる。今この西藏の戒律事はその大部分は義淨譯出の根本說一切有部毘奈耶出家事等の分本されてゐる揵度の分に對同するものであるが、比較對照して行くと、義淨にこれを缺くものもあり、又存在してもその譯出に際して義淨の意樂を以て省略したかと思はれる部分あり、或は義淨の譯文未盡に終つてゐる部分もあるのである。けれどもこれは義淨が必ずしも譯出しなかつたとはいへないので、すでに

彼の傳（開元錄第九）によれば證聖元年歸朝に際して賫らす所の梵本は經律論合せて四百部五十萬頌に近くその中生涯に翻譯の完成したものは僅に都て五十六部二百三十卷であつたのであり、特に又出二說一切有部跋窣堵（卽諸律中揵度跋渠之類也。梵有聲夏耳）約七八十卷一俱出二其本一未レ遑二刪綴一遽入二泥洹一其文遂寢とあるから西藏律の跋窣堵（vastu）が義淨譯現存のそれよりも整つたものであることは更に不思議でない。ただ義淨の譯本が未修治のまゝでも現存以外に猶若干あつたらうと思はれるが今はその本も篇目も知れないことは遺憾ながら仕方もない。しかし兎も角義淨の據つた說一切有部跋窣堵の梵本こそは今藩藏に流傳する戒律事の梵本 Vinaya-vastu と同本であつたことは疑はれないと思ふ。以下その篇目をあげて義淨本との對同有無の一般を記すであらう。

（1）出家事 Rab-tu-ḥbyuṅ-baḥi gShi（Pravrajyā-vastu）

第一函（khe）一紙より第一二八紙裏四行に至る。漢譯は義淨の根本說一切有部毘奈耶出家事（大正一四四四號）四卷に當る。義淨譯との出沒異同の著しきものをあげるならば（一）漢譯一〇二八頁（大正藏經第二十三卷）下段十四行に又事火者皆住二三見一云何爲レ三、一者不欲・二者一切欲・三者一切願不欲。乃至出家とありて乃至の意味通じ難いが、西藏文には三七紙裏五行より四一紙裏八行までにこの不欲と一切欲と一切願不欲との說明を詳しく示してをる。（二）漢一〇三〇頁下段三行に廣如二餘說一として略したものは藏では五二紙表三行から六五紙表二行に亘つて具さに優婆塞・沙彌・比丘の出家近圓

の方軌を述べてある。(三)漢譯第三卷の終は藏譯では八四紙裏二行であり、漢の第四卷の始めは藏では一〇三紙表五行でこの間約二十紙の藏文は漢譯に存在しないが、これは義淨譯の出家事がどうしても完本でない一證左となるものである。そしてこの不完全は義淨將來の梵本そのものに存在したのかも知れない。それは先づ義淨譯第四卷の頭首は第三卷の終と少しも連絡せず、而も又第四卷そのものとしても文章突起して漢譯のみを讀んでもここに脫落あることを充分想像せしめるものである。而してこの第四卷首の部分(大正藏二十三卷一〇三五頁中段より一〇三八頁中段二七行まで)は若し名くるならば僧護因緣譚ともいふべき部分で西藏譯では漢譯に對同文を缺く部分中の第九五紙表一行より一一七紙裏六行までゝあるが、この僧護因緣譚に對同する梵文が Divyāvadāna の中に存存するので、それは卽ちカウエル及びネイルが共同校刊の梵本三二九頁より三四三頁に至る第二十三譬喩 Saṃgharakṣitāvadāna である。この梵文を漢譯及び藏譯に對照すると大途合致するのであるが、次に述べるべき城喩經のことは藏譯と殊なり漢譯と等しく、ただ Nagaropama sūtra といふ經名を出すのみで本文は略してあり又この阿波陀那の首文を缺佚せることはその程度こそ少いが漢譯の首頭を失へるとよく似てをる。この梵文首頭の缺佚は梵本校訂者も逸早く注意してをり、その校本の Notes p. 707—708 に於てレオンフエーヤの助力により西藏文よりその缺漏を補つてをる。この梵本の首文の缺落と、城喩經の本文を略せるとは義淨譯と略々その軌を一にしてをるので義淨の用ゐた梵本律も亦既にこの種の缺

落をもつてゐたのでないかと推定するのである(四)前項にも略説したが、漢一〇三六頁下段一行、爾時僧護爲説二城喩經一令二其覺悟一説二是經一已……とあつて城喩經の内容は少しも記してないが、藏では一〇七紙裏三行以下に城喩經 Groṅ-khyer ṅa-buḥi mDo を顯示すとして如是我聞より始めて經の内容を悉く縷説してある。この城喩經といふのは漢譯には獨立經典として流行してゐる法賢譯の佛説舊城喩經(大正七一五號)に對同するもので漢譯には更に異譯として支謙の貝多樹下思惟十二因緣經(大正七一三號)玄奘の緣起聖道經(大正七一四號)の二本を有するが、西藏譯には獨立本としては存在しない。

(2)布薩事 gSo-sbyoṅ-gi gShi

第一函一二八紙裏四行より二〇八紙裏八行まで。義淨譯なし。

(3)隨意事 dGag-dbyeḥi gShi (Pravāraṇa-vastu)

第一函二〇九紙表一行より二一三紙裏一行まで。義淨譯根本説一切有部毘奈耶隨意事(大正一四四六號)一卷に當る。

(4)安居事 dByar-gnas-kyi gShi (Varṣāvāsa-vastu)

第一函二一三紙裏一行より二三七紙表三行まで。義淨譯根本説一切有部毘奈耶安居事(大正、一四四五號)一卷に當る。

(5)皮革事 Ko-lpags-kyi gShi (Carma-vastu)

第一函二三七紙表三行より二六〇紙表四行まで。義淨譯根本說一切有部毘奈耶皮革事（大正、一四四七號）二卷に相當し、その前半は梵文 Div. I. Koṭīkarṇāvadāna と對同する。

(6)藥事 Sman-gyi gShi (Oṣadhi-vastu)

第一函二六〇紙表四行より二九〇紙終まで、第二函 (Ge) 二九四紙、及第三函 (Ṅe) 始より四七紙裏六行までに亘る。義淨譯根本說一切有部毘奈耶藥事（大正、一四四八號）二十卷に相當するが、藏譯最後の部分第三函一三紙裏より四七紙までは漢譯には缺けてをる。梵本 Divyāvadāna の II, Pūrṇāvadāna, III. Maitreyāvadāna, IV. Brāhmaṇadārikāvadāna, V. Stutibrāhmaṇāvadāna, VI. Indranāmabrāhmaṇāvadāna, XXXII. Sudhanakumārāvadāna, XXXI の一部、VII. Nagarāvalambikāvadāna, XVII. Māndhātāvadāna の後半、XXX. Sudhanakumārāuadāna, 等はこの中にそれぞれ相當する西藏文及び漢譯を有する。

(7)衣事 Gos-kyi gShi

第三函四七紙裏六行より一一一紙表八行まで。漢譯なし。

(8)羯恥那衣事 Sra-brkyan-gi gShi

第三函一一一紙表八行より一一九紙裏八行まで。義淨譯根本說一切有部毘奈耶羯恥那衣事（大正

一四四九號）一卷に相當する。

（9）拘睒彌事 Ko-çam-piḥi gShi

第三函一一九紙裏八行より一二九紙裏七行まで。漢譯なし。

（10）羯磨事 Las-kyi gShi

第三函一二九紙裏七行より一三六紙表一行まで。漢譯なし。

（11）赤黄比丘（？）事 dMar-ser-can-gyi gShi

第三函一三六紙表一行より一五九紙裏二行まで。漢譯なし。

（12）人事 Gaṇ-ag-zgi gShi

第三函一五九紙裏二行より一七〇紙表四行まで。漢譯になし。

（13）覆藏（？）事 Spo-baḥi gShi

第三函一七〇紙表四行より一七四紙裏五行まで。漢譯になし。

（14）遮布薩事 gSo-sbyoṅ gShag-paḥi gShi

第三函一七四紙裏五行より一七九紙表三行まで。漢譯になし。

（15）臥具事 gNas-mal-gyi gShi

第三函一七九紙表三行より二一二紙表二行まで。漢譯になし。

(16)滅諍事 Rtsod-pa Shi-bar-byed-paḥi gShi

第三函二一二紙表二行より二四〇紙裏四行まで。漢譯なし。

(17)破僧事 dGe-ḥdun-gyi dBen-gyi gShi (Saṅghabhedaka-vastu)

第三函二四〇紙裏四行より二七五紙終まで、第四函 (Ce) 始終二七七紙。漢譯は義淨譯根本說一切有部毘奈耶破僧事(大正一四五〇號)二十卷に相當する。但し、漢譯は藏の二四三紙表八行まで、以下二七七紙までに至る約三十五紙に當る文を缺いてをる。これは漢譯を讀めばその文確かに未盡なることを知りうることで義淨の譯本は未定稿でなかつたかの疑を起さしめるものである。又この破僧事の初半分(漢譯では第九卷終まで、藏譯では第四函一〇四紙裏六行までは宋の法賢が譯せる衆許摩訶帝經(大正、一九一號)とその內容を殆ど全く同じくするものである。ロックヒルの名著『佛傳』The Life of Buddha の主文は多く今の西藏文から取材譯出したものであつた爲に、『歐米の佛教』の著者はこれを紹介するに當り「之は漢譯衆許摩訶帝經の蕃本を本としたのだ」(歐米の佛教 二〇四頁)とせられたが、嚴密には說一切有部毘奈耶破僧事の蕃本からといはるべきであつた。

以上十七事の中(2)(7)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)の十事は義淨の漢譯に現存しないものであるが、今十誦律及び四分律の揵度分に對照するに凡そ次の如く對配せらるべきものと推定される。然しその文句內容は決して同じくないのである。

（西藏本說一切有部律）	（十誦律）	（四分律）
（2）布薩事	（2）布薩法	（2）說戒揵度
（7）衣事	（7）衣法	（6）衣揵度
（9）拘睒彌事	（9）俱舍彌法	（9）拘睒彌揵度
（10）羯磨事	（10）瞻婆法	（10）瞻波揵度
（11）赤黃（？）事	（11）般荼盧伽法（苦切羯磨）丹本	（11）呵責揵度
（12）人事	（12）僧殘悔法	（12）人揵度
（13）覆藏（？）事		（13）覆藏揵度
（14）遮布薩事	（13）遮法	（14）遮揵度
（15）臥具事	（14）臥具法	（19）房舍揵度
（16）滅諍事	（15）諍事法	（16）滅諍揵度

二、波羅提木叉經 So-sor-thar-baḥi mDo (Prātimokṣasūtra)

所在　第五函（che）始より一八紙裏一行に至る。

譯者　根本說一切有部持律者比丘 Jinamitra, 大校修譯官 Cog-ro の人 Kluḥi Rgyal-mtshan 翻譯・校閱・刊定。

根本說一切有部の比丘戒本であつて、四波羅夷、十三僧殘、二不定、三十捨墮、九十墮、四提舍尼、衆學法百〇八、七滅諍合せて二五八條を含む。漢譯では義淨の根本說一切有部戒經（大正、一四五四號）一卷に相當する。至元法寶勘同總錄には當時、元の帝師にして西藩の三藏なる八思拔が譯した根本說一切有部苾芻戒本一卷の存在したことを傳へてゐるが現今は散佚し去つて知る由もない恐らく八思拔の譯ならば西藏本から漢譯したものであつたらう。さてこの西藏原文はサチスチャンドラ非ヂャブフーシャナによつて校訂せられ翻譯及び研究を添へてベンガル亞細亞協會誌十一卷三四合併號（一九一五年）に掲載せられ、我國では甲斐實行氏の研究（龍大論叢昭和二年第二七七號）寺本婉雅先生の翻譯（未刊行）がある。猶ペリオが庫車から將來した文書の中にブラフミー書體でかかれた說一切有部戒本の梵本殘簡あり、ルイフイノーが校訂研究して一九一三年の亞細亞誌（Journal asiatique 1913. p. 465—558）に發表してゐるがこれは羅什の十誦比丘戒本に當るので今の蕃本とは少し異なる。

三、戒律分別 ḥDul-ba Rnam-par-ḥbyed-pa (Vinayavibhaṅga)

所在　第五函一八紙裏二行より二六九終まで、第六函（Je）二六五紙、第七函（Ne）二七二紙、第八函（Te）二五三紙。合計一千百四十二紙、百十三卷、二萬五千首盧迦と算せらる。

譯者　二のに同じ。

戒本の制條を逐うてその緣由等を說いたもので、義淨譯の根本說一切有部毘奈耶（大正、一四四

二號）五十卷によく對同する。併しやはり義淨は處々省略の法を用ゐ、文中にも梵本具有恐煩故略と斷つてをる位である。この書の中にも Divyāvadāna のと同じ阿波陀那を屢々含有してをる。卽ち第七函五八紙表三行以下（漢では大正二十三卷七九四頁下段二六行以下）は Div. XXXV. Cūḍāpakṣāvadāna に、同一〇六紙表六行以下（漢、同八一〇頁下段）は XXI. Sahasodgatasya prakaraṇāvadāna に、第八函一七紙表八行以下（漢同八五七頁上段學處第七十九）は XIII. Svāgatāvadāna に、同九五紙表七行以下（漢同八七三頁中段二九行以下）は XXXVII. Rudrāyaṇāvadāna に、同一五八紙裏四行以下（漢、同八八六頁上段一九行以下）は XXXVI. Makandikāvadāna に合致し梵藏は殊によく對同する。

四、比丘尼波羅提木叉經 dGe-sloṅ-maḥi So-sor-thar-paḥi mDo (Bhikṣuṇī-prātimokṣa-sūtra)

所在　第九函（The）始より二五紙表五行まで。

譯者　二のに同じ。

義淨譯の根本說一切有部苾芻尼戒經(大正一四五五號)に相當し、戒條の對照等は詳しく本誌前々號西本龍山氏の戒本研究の論文附表に紹介せられた。

但し彼の表に於て西藏本に七滅諍法が缺となつてゐるのは苟且の誤謬で發行前氣づいて印刷部へ訂正を申込まれたがすでに事後でそのまま公にされてしまつたものであつた。

五、比丘尼律分別 dGe-sloṅ-maḥi dDul-ba Rnam-par-ḥbyed-pa (Bhikṣuṇī-vinayavibhaṅga)

所在　第九函二五紙表六行より最終二九〇紙まで。

譯者　二のに同じ。

義淨譯の根本說一切有部苾芻尼毘奈耶(大正、一四四三號)二十卷と略々相通ずる內容の書であるが、文々句々に至つては甚だ異なる所が多い。同一原典の翻譯であるとは遽かに決定しかねるものだ。至元錄には前の根本說一切有部毘奈耶及び後の根本說一切有部毘奈耶雜事と共に右三律蕃本闕といつてあるが、前後の二律は蕃本と義淨譯と必ず同本とすべきものである。たゞこの比丘尼毘奈耶のみは少しく異本とみねばならぬのである。

六、毘奈耶雜事 dDul-ba Phran-tshogs-kyi gShi (Vinayakṣudraka-vastu)

所在　第十函 (De) ?紙及び第十一函 (Ne) 三一六紙

譯者　印度の親敎師 Vidyakaraprabha ; Dharmaśrīpradha 及び翻譯官尊者 dBal-ḥbyor 譯す。

大谷大學圖書館藏のものは第十函を缺くのでその部分は未檢であるが、後半の第十一函を以て漢譯と對比するにこれはやはり義淨の譯出せる根本說一切有部毘奈耶雜事(大正、一四五一號)四十卷に相當するものである。第十一函も大谷大學本は第一葉を失ひ又第三一三紙より最終の三一六紙までは木版刷でなく、寫本である。流傳の間何等かの事情によりこれらの部分を佚失し、終の四枚は補寫されたものであるらしい。さてこの函第二紙は義淨譯雜事の第六門第二子の半、卽ち大正藏經

では第二十四卷三一五頁中段第十行後時其女天授云々の所より始まり四一四頁中段卽ち此律本の最終までに對同するもので、その中三七紙表八行より五〇紙裏二行までは Divyāvadāna XII. (pp. 143—166) 二三六紙表五行より二四〇紙表一行までは同じく Div. XVII (pp. 200—209) に各々對當する梵文を有する。

七、律無上書 ḥDul-ba gShuṅ Bla-ma

所在　第十二函 (Pe) 初紙より八七紙表二行まで。

八、律最勝書 ḥDul-ba gShuṅ Dam-pa

所在　第十二函八七紙表三行より最終二八三紙まで及び第十三函 (Phe) の始め大半。但し第十三函は大谷大學に其本を缺く故葉數を明になし得ない。

この二書は何れも原梵名を Vinaya-uttara-grntha といひ、同本の異譯である。而して無上書の方は不完本で、もと Kluḥi-rgyal-mtshan の時に譯されたが、校訂未了字句未修で實修にあたつて幾多の疑義を生じたから、Ḥor-rgod 寺の長老 Dor-ma-sen-ge が律の四部書（一律事、二戒本及び律分別、三毘奈耶雜事、四律無上書）を比丘尼律分別と共に編纂した際に Byaṅ-chub Sen-ge; Tshul-khrims Yon-tan 等が衞藏の諸寺・サムエー等から異本を得て疑點を一掃し弘布したものだといふ。後者の最勝書は終一函を缺失してをるので確言し得ぬが、谷大所藏の部分で檢すれば波羅夷・僧殘・

不定・捨墮・等の戒本の廣釋の部分より近圓・布薩乃至破僧等の跋窣堵の部分まで及んでをる。その次には恐らく尼律の戒本等に關する部分があるのであらう。ナルタン版デリゲ版等を一覽の機を得て補足したいことである。無上書はこの中波羅夷と僧殘と捨墮の二十條までで終つてをる。かくVinaya-uttara-granthaに二本を生じたる事由は無上書の後序に引ける戒律校勘疏(Luṅ Shu-baḥi ḥGrel-ba)によれば、世尊の滅後、婆羅門王プシュヤミトラ Pushyamitra なるもの教法に對して瞋を抱き支提を破壞し、僧伽藍を燒き、比丘を殺し、經卷を束ねて燒き棄てたことがある、その後、諸比丘は次第に諸國に散在せる三藏の函帙を集めて之をマツラー Mathurā に編輯したが、その時このUttaragranthaの函帙は得られなかつた。而るに後、迦濕彌羅の一比丘がこの書を誦すると聞き、往いてこれが誦出を請うた。時にかの比丘は一部分は記憶すれども一部分は記憶せずといひつゝ口誦したものを書き取り、そのまゝ久しく缺略のまゝ傳はつたのが律無上書であるといふ。最勝書成立の因緣は今之を詳しくし得ないが、谷大本に缺く卷末には何等か序跋があつて之を明かにしうるかも知れない。兩書とも漢譯に對同するものを發見し得ない。

三　律部以外散在のもの

上記の外、西藏々經では律部に編入されてゐないが、それに對同する漢譯が、古來律典として認められてゐるものを摘記するならば、

九、俗諦眞諦說示大乘經 Kun-rdsob-daï Don-dam-paḥi bDen-pa bStan-pa (Saṃvṛti-paramārtha-satya-nirdeśa)

諸經部第十六函 (Bu) 二五五紙表七行より二七九紙表六行に至る。

漢譯では左の三本に當る。

清淨毘尼方廣經　一卷　羅什譯　(大正一四八九號)

寂調音所問經　一卷　法海譯　(大正一四九〇號)

文殊師利淨律經　一卷　法護譯　(大正四六〇號)

三本中羅什及び法海の譯に親しく、法護譯は結末の文數紙を缺いてゐる。大正藏經に前二本を律部としながら第三本を諸經部に編入したのは何故か、前後をみるに文殊師利關係を以て移したものらしいが妥當な處置ではない。又至元錄にはこの三本の外に同本異譯として宋の智吉祥等譯の清淨毘奈耶最上大乘經三卷を錄し、この經名は又翻譯名義大集(榊博士本) No. 1368 にも出づるを以てその當時には存在したことは疑ないが、現存藏經中には傳はらない。但し三卷といふ卷數より推して內容は西藏及び什海兩三藏等のものと同一でないかも知れぬ。

一〇、淨業障大乘經 Las-lyi Sgrib-pa Rnam-par-dag-pa (Karmāvaraṇaviśuddhā)

諸經部第十八函 (Tsu) 二九八紙表四行より三一三紙表七行まで。

漢譯では

佛說淨業障經　一卷　失　譯　（大正一四九四號）

に對同する。この漢譯は法上錄に竺法護譯とするも開元錄には其文句護公の譯經の文勢と全く異るを以て失譯とすると判定されてをる。

一一、斷絕業障大乘經 Las-kyi Sgrib-pa Rgyun-gcod-pa (Karmāvaraṇapratiprasrabdhi)

一〇につゞいて三一三紙表七行より此函最終の三二三紙まで。

漢譯では次の二本殊に僧伽婆羅譯によく對同する。

菩薩藏經　一卷　僧伽婆羅譯　（大正一四九一號）

大乘三聚懺悔經一卷　闍那崛多譯　（大正一四九三號）

至元錄は崛多譯に梵題を示し蕃本と對同すといひながら、僧伽婆羅譯に對しては蕃本の有無を云々してゐない。從つて南條目錄も至元錄を踏襲されたが、事實西藏譯との對同は前述の如くであつて說處會衆の如きも西藏譯及び菩薩藏經は祇園、比丘千二百五十、菩薩七萬（菩薩藏經は七萬二千）であるが、獨り三聚懺悔經は毘舍梨大光明林、比丘千餘、菩薩無量となつてをる。經末帝釋が法門受持について經名を問ふ一段も前二者は合致するが後者にそれを缺いてをる。

以上は文殊師利淨律經を除いてその他の漢譯が大正藏經に於て律部に編入されたものゝうち對同

藏譯の存するものであるが、猶更に大正藏經では律部佛典と認められなかつたけれども從來、さしあたり縮藏に於て律典として編集されたものゝ中で藏譯のあるものを拾へば次の如くである。

一二　佛藏經

この藏譯は二本あり、一は諸經部第十函（Tu）一五九紙裏二行より二二二紙表三行までに存し、他は同じく第十九函（Tshu）一紙より八一紙裏三行までに編せらる。前者は Sans-rgyas-kyi mDsod-kyi Chos-kyi Yi-ge（佛藏法文）と題し Min-gcig-ni Chos-so-cog-las gDams-bstsal-paḥo（一名選擇諸法）と併せ記し、漢譯の

佛藏經（一名選擇諸法）四卷　鳩摩羅什譯（大正六五三號）

から西藏へ重譯したものである。梵語題目を缺き、品名を各品の終に出さずして常に前に安じ、譯語も普通 mDo とあるべき經を Chos-kyi Yi-ge とし、Sans-rgyas Rjes-su-dran-pa とあるべき念佛を Sans-rgyas bSam-pa とし、Yoṅs-su-gtaṅ-ba とあるべき囑累を Thabs-bcol-ba とする等、漢文の直譯なること歷々たる重譯ものである。ペリオがベックの伯林甘殊爾目錄補箋（Journal asiatique 1914. p. 131）中にこの經のことに言及せる時、いかなる類似の經題も漢譯藏中に見出されないといつてをるが、それは博覽なるペリオ氏にとつては不圖した見落しであつたのだらう。

後者は Saṇs-rgyas-kyi Sde-snod Tshul-khrims ḥChal-bTshar gCod-pa（Buddhapiṭaka-duḥśīlanigr-

ahi）と題し、正しく前記什譯佛藏經の原本と認むべき梵本から西藏譯したものである。西藏佛典の大部分は梵本からの直接譯であるが、梵本になくして支那にありしものは一部分支那から重譯して、三藏を補つたものであつて、同一經典を一方梵本から、一方漢本から譯して藏中に編入せることは稀有なる例である。この經の如きはかういふ點から西藏の兩本を比較し更に漢文と對照して研究するならば經典の本文研究に西藏文の方面からも漢文の方面からも得る所少からざるべきことはかの金光明經と共に蓋し双璧であらう。

一三、海龍王所問大乘經 Klu̱hi Rgyal-po Rgya-mtshos Shus-pa (Sāgaranāgarāja-paripṛcchā)

諸經部第十四卷（Pu）二〇六紙表五行より二一三紙表七行まで。

漢譯では

佛爲娑伽羅龍王所說大乘經　一卷　　施護譯　（大正六〇一號）

によく對同するものである。

四　結　論

以上によつて西藏大藏經に存するまさしき律典は殆ど何れも根本說一切有部に屬するものといつて差支ない。たゞ七と八との Vinaya-uttara-grantha はなほ精細に研究さるべきものである。

而して元代に藏漢兩大藏を對照錄載した至元錄にはこの外漢譯の摩訶僧祇律・十誦律・根本說一切

有部尼陀那目特迦・五分律・四分律・僧祇比丘戒本・僧祇比丘尼戒本・十誦比丘戒本・十誦比丘尼戒本・五分比丘尼戒本・五分比丘戒本・四分比丘戒本・四分律比丘尼戒本・四分律僧戒本・舍利弗問經・大沙門百一羯磨法・十誦羯磨比丘要用・優婆離問佛經・四分律删補隨機羯磨・四分僧羯磨・四分尼羯磨・根本說一切有部毘奈耶頌・同雜事攝頌・同尼陀那目特迦攝頌・根本薩婆多部律攝・毘尼摩得勒伽等に對して何れも蕃本と同じきことを記し、却つて前に出せる根本說一切有部毘奈耶・同苾芻尼毘奈耶・同毘奈耶雜事に對しては蕃本闕といつてをる。これによつて元代の蕃本は現流の蕃本とその如く內容が異つてをつたのであらうとみる人もある（例へば前に出せる甲斐氏の論文の如き。）けれども、それは少しく皮相な考へ方であらう。何となれば至元錄の蕃本との對同有無の記事は屢々誤謬があり、又至元錄の編者は、その淨伏の序によつて窺つても必ずしも常に蕃藏原本と一一比較對照したのではないからである。今西藏律に存する根本說一切有部毘奈耶等を闕としたのも、摩訶僧祇律等多くの律典に對同する蕃本ありとしたのも、一つはこゝから來る誤謬もしくは杜撰であり、一つは漢譯の異部派のものでも戒本の如き大體相通ずる內容のものは、それをもて各々の對同本があるといふのでなく、何れもをたゞ一つの西藏戒本、それは嚴密には根本說一切有部戒經のみに同本といひ得らるべきものに對して漫然と蕃本に同じと注したものに違ひない。西藏にはしかく多くの律典が存在した記錄もなければ、又その證左たるべき斷簡等の發見されたことも聞かないのである。かくて要約して言ひうるであらう。西

藏の律は說一切有部所傳のものゝみであると。以上。（昭和三年十月稿）